狛犬とゆく言語学ツアー

佐藤貴裕

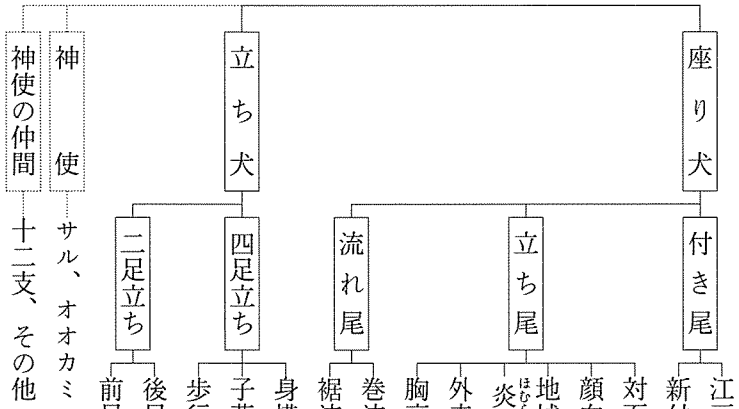
分類と言葉

職業がら、狛犬をめぐることがらについても言葉の方に気が向きます。狛犬をきっかけに興味深い言葉の振る舞いや、連想される面白い現象について御一緒に見ていきたいと思います。

まず様々なタイプの狛犬をどのように分類し、どのように呼ぶのかに、興味をひかれました。たとえば、久保田和幸氏の『狛犬探訪　埼玉の阿・吽たち』（さきたま出版会、二〇〇三）の分類図は別掲の如くです。さまざまな形態の狛犬がいることが大づかみにできます（久保田氏の御好意で最新のものに差替えました）。

数体ならいざしらず、多数の狛犬を見たら、整理・整頓が必要です。そうしないと全体像がすんなり把握できないからです。やむにやまれぬ事情でするわけですが、辛い思いはされていないでしょう。むしろ、ご

［全体像でみる狛犬の層別］



くごく楽しい、爽快感すらおぼえながらの作業ではないでしょうか。

私たちは、千単位・万単位の単語を記憶しています。が、そのなかで自分の作った言葉はどれほどあるでしょう。子ども・ペット・マスコットの名前ぐらいでしょうか。このほかは見ず知らずの他人が作ったものばかりが頭の中にあるのです。言葉でコミュニケーションするということは、単語を片っ端から覚えなければならない、受け身の作業でもあるのです。

ですから、ほかならぬ自分が言葉を作る側にまわることは、なかなか痛快な体験だと思います。単に命名するだけではありません。自分が見てきた何百という狛犬の特徴を一体一体検討し、それぞれの位置を定めていく作業でもあります。分類・整理しながら順序立てて、組織だった体系として仕上げる。これはもう、自分なりの「狛犬宇宙」を作りあげる仕事ですね。創造主のような感覚もあることでしょう。大変刺激的な言語操作なのではないでしょうか。

究極の命名

ねづてつや氏『狛犬学事始』（ナカニシヤ出版、一九九四）も楽しんでらっしゃいますね。たとえば、「こまやん」（岡崎型）を例に尻尾学の一歩を踏み出すくだりでは、にんまりされたお顔が浮かぶようです。

中心で一番高く伸びた毛だが、そのくねりかたは「炎」を見るようだ、よって仮に「炎尾」と名付けてしまおう。右の部分は、円（渦）が三つ、胴に沿って伸びたのが一束である。（中略）流れるような感じだから「流（ながれ）」の方がいい。（中略）裏側も「三円一流」であるはずだし、合計すればよい。これで、「六円二流一炎尾」となった。

「……尾」というのも、もっちゃりしている。もっと優雅な名はないか。こういう場合は喩えればよい。「峰」なんかどうだろう。よし、これで決定だ。「六円二流一炎峰」……ろくえんながれいちえんぽう……なかなか音の響きも良い。

分類と命名は、多数の狛犬を見てきたものだけに許される極上の言葉遊びなのでしょう。

尾の名称にそこまで必要かとも思いますが、一体ごとの特徴を把握するには不可欠でしょう。大まかな分類ではすくえない細部の個性がその狛犬の最大の特徴だとしたら、なんとか命名してやりたくなります。

実は「六円二流一炎峰」とか「三尾四輪六円四流三筆峰」（宇治神社）などから連想したのが、打ち上げ花火の玉名でした。昇り方、花の同心円の数・色、花の種類の順に組み合わせていくものです。

「八重芯錦牡丹先紅露」とは、親星が開くと錦牡丹が開き、花弁を紅色に変化させてからピカっと光ります。芯は二重になり、芯の中にさらにもう一つの芯を咲かせます。（中略）

「昇尾花付銀芯紅菊」とは、上空に昇るまでに次々と小さな花が開き、炸裂すると芯が銀色に光り、尾を引いて紅色の花が開く……となります。

池田まき子『花火師の仕事』無明舎出版

「牡丹」は点光源が移動しながら消えるもの、「菊」は中心から長い光芒を見せるもの。ちょっとした約束事さえ知っていれば、玉名を見た瞬間、頭の夜空には大輪の花火が浮かんでいるのです。これはちょっと素敵ですね。分類名を見た人は、あたかも眼前にいるかのように狛犬を思い浮かべられる……命名の理想はこうしたところにあるのでしょう。ねづ氏もそれを意図しているはずです。

寄り道二題

せっかくですので、右の引用にそって花火の名称もものぞいてみます。

「八重芯」は二重円のことなんですね。初めてこの花火ができたとき、美しさのあまり名付けられたそうです。より高度で美しいのに三重円・四重円は「三重芯・四重芯」となります。言葉の世界も早い者勝ちのようです。

「露」は「輝」とも呼ばれますが、ひときわ明るくなることをいいます。艶とかテカリとかからの命名でしょうが、俗語的なテカリが漢字と結びつくのが面白いですね。職人さんの言葉が反映される、現場中心の雰囲気を感じさせます。

現場の意向といえば、ガス・電気溶接工場が「〇〇熔接所」と火偏を使ったり、灰皿から新幹線の先頭部品まで加工するヘラ絞りの会社が、材料の金属にちなんで金偏の「鉸」を使うこともあります。「金を失う」と読める「鉄」を嫌って旧字体を使う「製鐵」会社も多いのですが、「東日本旅客鉄道株式会社」のロゴでは「金偏に矢」とデザインしています。さすがに文章中では「鉄道株式会社」ですが、カメラのキヤノンは、ロゴでも文章中でも「キヤノン」とすべて大きな字で通しています。案外、創造的で自由な文字使用は多いようです。

さて、もう一つの寄り道に。「神使」です。上杉千郷氏『日本全国獅子・狛犬ものがたり』（戎光祥出版、二〇〇八）の説明が工夫のあるものでした。

それらの中には、一対になってちゃんと狛犬の役割を果たしているものもいるのです。

東京都墨田区の牛嶋神社には、狛「牛」がいます。（中略）

神奈川県には多くの杉山神社がありますが、横浜市港北区の杉山神社には、一対の狛「ねずみ」がいます。

コマ鹿（大原野神社。京都市西京区）や、コマ兎（調神社。さいたま市浦和区）も念頭にあったことでしょう。各地の稲荷社ならコマ狐ですね。狛犬にたとえた、楽しく分かりやすい説明ですが、なぜ私たちは分かってしまうのか不思議な気もします。次のような引き算を、上杉氏も私たちも共有しているのでしょう。

コマ＋イヌ＝参道の両脇にある＋犬（獅子）像

コマ　＝参道の両脇にある

長年使ううちに語源とされる意味（たとえば高麗）が見事に洗い流されたわけです。

同じような例は多くて、たとえばスリコギもそうでしょう。正しく「摺粉＋木」に分析できる人は多くはなさそうです。相方のスリバチはどう考えても「摺＋鉢」ですから、ついスリ＋コギと分析（異分析）しそうです。スリは「摺」とすれば、残ったコギは使うときの姿勢・動きから「漕ぎ」に結びつけないともかぎりません。

コマの語源解釈にもどれば、より直接的・直感的には将棋の「駒」を連想することもありそうです。チェスの「駒」まで思い浮かべたら、台座に乗った狛犬の姿にそっくりですから、これが本来の語源と考えそうです。

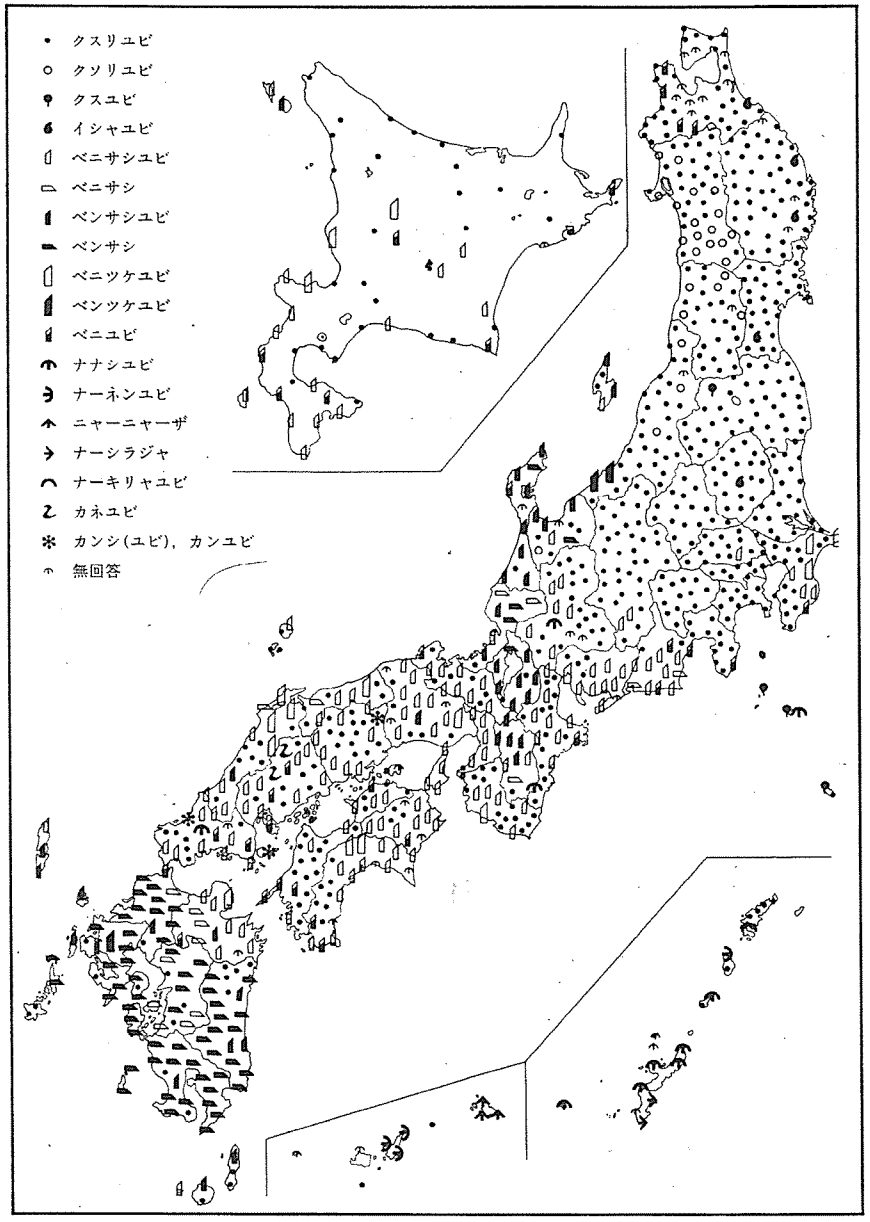
狛犬の語源を記した著作が多いのですが、私たちがすでに狛犬の語源を忘れたり迷ったりしていることの裏返しでもあるのです。

伝播の形式

『日本全国獅子・狛犬ものがたり』では、北海道神宮の「かまえ」型狛犬も紹介しています。頭を低く落とし、後ろ足を立てて尻をかかげ、さらに尾を高くつっぱる出雲型です。日本海岸を行きかった北前船で運ばれたものとのことです。

同じようなことは言葉の世界にも見られます。たとえば、図のような薬指の方言ですと、西日本に広くあるベニサシュビ・ベニツケュビ（角の欠けた短冊形）が、佐渡島・青森津軽・北海道と、海を渡ったさまが見てとれます。

なおこの図は、佐藤亮一監修『方言の読本』（小学館、一九九一）のダイジェスト版です。原図は、国立国語研究所編『日本言語地図』第三集にあります。色



薬指図（佐藤亮一監修『方言の読本』小学館1991）より転載

刷りで綺麗な地図ですので、図書館などで是非御覧ください。ちょっと見づらいですが、国語研究所のホームページでも公開しています。

狛犬も言葉も、移動手段に応じてあちこちへ伝播していくわけですが、言葉の伝播をあつかう分野を方言地理学といい、多くの研究とノウハウの蓄積があります。

基本的な考え方は、まず言葉を、文化的・政治的中心地から次々に伝播するものと考えます。言葉は同心円状に分布することになりますが、これを応用して、大きな同心円を作るような南端・北端の言葉は古く、中に行くほど新しいと捉えれば、言葉の歴史をたどることができます。

薬指の方言なら、まず沖縄方面のナナシュビ（名無指）が注目されます。北端に対応するものはないのですが、青森県に無回答の箇所がかたまってあります。名がなければ回答しようもないわけですから、沖縄と青森で大きな円を作ると見てよいでしょう。昔の日本では、薬指には名称がなかったか、それを反映したナナシュビを使っていたわけです。

ついで、東日本のクスリユビが古いようです。対応する南側は奄美大島が注意されます。西日本各地にも点々とありますが、古い言葉が消えていく途中なのでしょう。結局、一番新しい形がベニツケユビ・ベニサシュビということになります。

ただ、現代では各種メディアに乗って東京の用語が広くばらまかれますから、クスリユビが新しいように思えてしまいます。が、それは見かけだけのことで、日本語の長い歴史からみれば、クスリユビは古い言葉だと分かります。

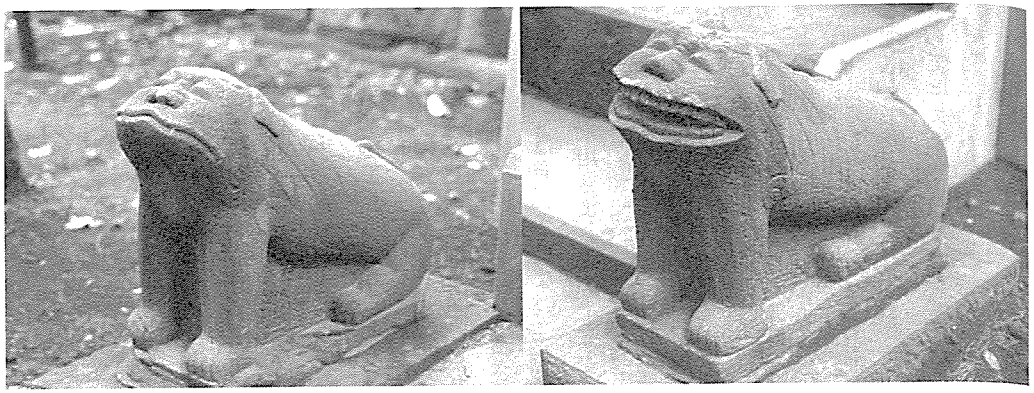
神社の通称

最初に久保田氏の『狛犬探訪　埼玉の阿・吽たち』を採り上げたのは、私の出身が埼玉県川口市なので親近感や地域的な関心もあってのことでした。

巻末のデータでは、川口市には新しいものばかりなのですが、一対だけ享保五（一七二〇）年建立のものがありました。何を隠そう、幼いころに遊んだこともある前川神社（勢貴社。前川三丁目）のものです。

久保田氏にも特別な思いいれがあるようです。

この犬に出会った時、何と言ったらよいのか一



前川神社　狛犬　阿形　　前川神社　狛犬　吽形

久保田和幸氏提供

瞬とまどいを感じた。とても不可解な顔をした犬であった。その顔は犬というよりも人の顔をしていた。呆然とした私の脳裏に、ふと浮かんできたのが「羅漢犬」であった。以来、私はこの犬を「羅漢さま」と呼んでいる。

この犬の顔を見ていると、「何かこう」、ほのぼのとしたものを感じるのである。（中略）とても小さくおまけに地面に直接置かれて足元にいるため、しゃがんで話しかけたりもした。機会があれば何度でも会いに行きたい犬である。

これは一目見なければと、帰省ついでに訪れたのですが、会えませんでした。神社の方に聞けば奥に保管したとのこと。「何十年もご無沙汰で、今さら会ってやるものか」と臍を曲げられました。

正月も三日。参詣者もほどよい数で、鬱陶しからず寂しからず。久しぶりに境内を歩いて昔のことを思い出しました。蟬とりや缶けりに興じたこと、周囲の住宅地一帯は竹藪だったことなど。そしてこの神社を「ひか様」と呼んでいたことも。

子ども心にも不思議で、「光」と関係するのかなと

思っていました。神棚には鏡があるものですし。

一番ありそうなのは氷川神社からの分祀ですが、縁起には書かれていません。所蔵品から勝海舟自筆の幟が発見されたときには『氷川清話』を連想しました。海舟の談話筆記ですが、赤坂の氷川神社近くに住んだのでこの名があるそうです。彼の縁で「ひか様」と呼ばれるようになったのではないか。

この場合、ヒカワサマ（氷川様）がなまってヒカサマになったと考えるのですが、中間にヒカーサマのような発音があったはずです。〔a〕にはさまれた〔w〕が、くだけた会話では発音されないことがあるからです。ヒカーキヨシ（氷川きよし）・カーラ（瓦）という発音に接したことはないでしょうか。ただ、耳はそう聞いていても、頭の方でヒカワ・カワラと処理してしまって気づかないかもしれません。こういう働きも面白いのですが、長くなりますので別の機会にいたします。

推測はほどほどにして事実が知りたい。父親に電話で尋ねれば、なんと即答でした。その昔、中学校はとなりの青木地区と一緒で、青木五丁目には氷川神社がある。そちらでヒカサマと呼んでいたのを、前川の子どもたちが真似しただけでなく、神社ならなんでもヒカサマというようになった、とのことでした。

青木から前川に言葉が伝播したことが確認できるわけですが、ほぼ同時に「意味の拡張」「希薄化」も起こったわけです。陶磁器のことをセトモノと通称したり、中国・四国地方ではカラツモノといったりするのですが、本来、瀬戸焼・唐津焼をさす固有名ですね。ホッチキスやセロテープといった商標名が一般化したのと同じ現象があったのです。

どんな言語にも、どんな方言にも起こりうる現象と承知していましたが、ヒカサマでぐっと身近に実感できました。それにしても、もう少し親を信用して、何でも聞いておくものだと思ったことでした。

狛犬にまつわることから、あれこれ連想しての言葉ツアー、埼玉県から出発して再び戻ってくることができましたが、いかがでしたでしょうか。これを機会に、言葉の世界や、言葉について考える世界も、身近に感じていただければと願っております。

（さとう　たかひろ・岐阜大学准教授）

『季刊悠久』第116号（2009年5月）所掲